いらつめ

明治二十年十月十日發兌

第四號

目次

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令徳を進め、及び地位を高むるにあり、家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令徳を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尚の風を養ふべし、その他時時の要報及び評論を掲くるものあり、

左の諸君ハ此度更に本社の業務を協賛し論文を寄せんことを約諾せられたり。

華族女學校勤務 佐野安君

同 秋山四郎君

東京高等女學校勤務

理學士 鮫嶋晋君

理學士 宮崎道正君

文學士 天野爲之君

文學士 高田早苗君

文學士 岡田良平君

醫學士 竹中成憲君

法學士 一木喜德郎君

いらつめ

女子の德育

理學の思想を女子に與へ衣食衛生育兒の眞正なる方法を知らしむるは今日日本女子敎育の最大急務なり。体育を奬勵して纖柔虛弱の体質を一變し强壯なる子女の母たるの基を置くも亦今日の一大要務なり。然れども物一方に偏するときは亦自ら其弊害を免れざると素より自然の理にして智識の開發は誠に美なり体質の改良は誠に善しと雖も、專ら智識の一點に着目し專ら体質の一事に吸々たるに至ては決して之を眞正なる敎育の本旨を得たるものと云ふを得ざるなり。乞ふ体育に付て之を論せん。蓋し日本の婦女は近時に至る迄習深窓の內に起臥し手足を勞する所は只室內の行歩灑掃の業務等に過ぎず。体質愈々纖弱に陷り性情亦自から活潑の氣風を欠くに至れるを以て、女子敎育主義の一變と共に最も敎育者の注意を促し百方之か匡正の法を講じて以て活潑

の氣風を養成するに怠らざるは余儕の慶賀に堪へざる所なり。然れども徒らに活潑の氣風を慕ふて只此一方に狂奔するに至ては、或は之が爲女子をして其本務に任ずるに適せざらしむるの恐を懐くも余儕其全く杞人の憂に非らざるを知るなり。夫れ女子をして家政を調理し兒童を保育するの任に適せしむる所以のものは何ぞや。女子の性質綿密にして能く細事の勞に堪へ且つ耐忍の氣に富んで擧動躁急ならず孜々として勤め諄々として誨ゆるを得るを以てに非ずや。然るに活潑の余弊は自から疎漏と躁急とに流れ易く活潑の氣風其度に過ぐるときは自から家政の細事を勤むるに懶く育兒の勞を執るを屑とせざるに至るは、蓋し勢の免れざる所にして、現に今日の婦女子と雖とも少壯にして人の母たるものは、往々小兒保育の勞を煩はしとするの狀あるは經驗の余儕に敎ゆる所なり。斯くの如きは畢竟活潑の氣風を養成するの一方に偏癖するの余弊にして女子の体育を奬勵すると共に豫め之か防遏の策を講ずるは實に當局者の一大要務なり。以上論ずるが如く智育美なりと雖ども体育善なりと雖ども各一方に偏するときは亦其弊を免れず。智德体育並び進んで始めて弊

害なきの教育を見るは今敢て余輩の多辯を要せざるなり。且つ夫れ余輩が屢く論ずるが如く今日は是反動の時機なり。深窓の裡に蟄居したる婦人の遽かに自由の空氣を呼吸するに至りたる時代なり。是を以て深窓蟄居の時に行はれたる道徳教は皆迂遠なるの感覺を生じて、恰も洋學者の漢學を擯斥するか如く、往々腐儒の諄言を以て之れを視るものあるに至るは、蓋し時勢の然らしむる所にして、勢の進む所或は道徳を以て大に心頭に掛くることなきものあるに至るを恐るゝも、未た遽に其然らさるを斷言する能はさるなり。女子の教育に從事するもの亦た教育の並行を希はさるに非ず、反動の危險なるを知らざるに非すと雖とも、獨り如何んせん、徳育は其効驗の最も見難く其方法の最も講じ難きものなるを、今日一事を教ゆれば即日已に一事の生徒の腦裡に存するものあり。本年身体の運動を勤むれば明年巳に身体强壯の効を見るべし。智育体育の効驗は恰も響の物に應するが如く當局者の困難割合に少しと雖とも只道徳は多少各人の腦裡に存する者にして教育の力に由て之を變更増減するは決して容易の業に非ず。是を以て徳育の奬勵を務めさるに非すと雖とも、自から智育体育

と並行し難きの情あるは、蓋し徳育の方法未だ其宜しきを得ざる者あるの致す所なるべし。是余儕か此に論題を掲げて女子の徳育を論ぜんとする所以なり。

論語を讀んで論語を知らずとは古來の俗諺にして其意蓋し道徳の敎を諳んずと雖ども、未だ必ずしも道徳を實行する能はずと云ふに在り。然れども今日學理の眼を以て之を見るときは道徳を口にするもの丶必ずしも道徳を躬行する能はざるは固より當然の理なり。夫れ道徳なるものは純然たる智識に非ずして半ば感情より成るものなり。鰥寡孤獨廢疾の者を見れば頻りに之を憐み之を救はんとするの念慮を發するは必ずしも未來の應報を冀ふて然るに非ざるなり。渇すと雖ども盜泉の水を吞まざるは必ずしも法律の嚴罰を恐れて然るに非ざるなり。凡そ人間の行為にして利害得失の大小を量りたる結果なるものは只其一小部分に過ぎず。善事を見ては直に之を慕ひ惡事を見ては輙ち之を惡む是皆人の感情より發する所にして、決して利害の大小を問ふて後始めて此の如きに非ざるなり。此簡單なる道理に注目せず善を慕ひ惡を嫌ふの感情を養成せずして只「可し」「勿れ」の兩語を以て道徳を人に敎ふるを得と想像するは

諺の最も大なるものなり。

然らバ則ち眞正の德育法如何凡そ腦裡に一思想の再三再四來往するものあるときハ不知不識其思想を外に發露するの傾あるハ學理の示す所にして亦日常經驗の証する所なり。心中深く思ふ所あれバ或ハ自から獨語を發し、名刀を見てハ或ハ一時發狂して人を殺さんとするの類ハ、余輩の或ハ日常經驗し或ハ時々其例を見る所にして其學問上の原因に至てハ、余輩今此に之を論するを欲せずと雖ども、兎に角余輩ハ此普通の經驗を以て德育、就中女子の德育に利用せんと欲するものなり。

所謂普通の經驗を利用するとは何ぞや女子をして賢母良妻の傳記を讀ましむると是なり。然れども賢母良妻の傳記も之を書する自から其法あり。徒らに某ハ某事を爲せり某ハ某事を爲せりと云ふも只歷史上の事實を知らしむるに止まり、善事を欣慕し惡事を嫌惡するの結果ハ得て望む可からず。余輩の女子をして讀誦せしめんとするハ素より此の如きの傳記に非ず文章形容の間に於て事の惡む可きハ一讀して嫌惡するの念を生せしめ事の善みす可きハ一見

して欣慕の念を生せしむるが如く形は小說に似て其實正史なるものに非ざれば余儕の希望を滿足せしめざるなり。　余儕不幸にして今日猶は此の如き適切の修身書を見ずと雖ども、若し幸にして後來余儕の主義に由て編纂したる傳記を得は德育の法亦た簡單なる「可し」「勿れ」に依らずして余儕が前項に陳述したる眞正の學理に基き賢母良妻の行事を讀んで心に想像を描くの際不知不識古を慕ひ惡を忌み恰も反射機能の如く感情に由て自から善惡を識別するに至らん。是即ち所謂感情を養成して以て道德を進むるの道なり。

以上論ずる所は亦男子の德育にも適用す可きものの多しと雖とも、婦人は特に感情の鋭敏なるものなるを以て此婦人の性質を利用するときは、余儕が主張する德育の方法も其效驗一層速なるべく、且つ敗德の由て起る所以は感情を抑制する能はさるに在るものの多きを以て、其鋭敏なる婦人の道德を進むるには、徒らに訓言論語を以て氣炎の盛んなる欲情を壓せんとするの徒勞を止め、正道に適したる感情を以て有害の感情を妨ぐは、蓋し女子德育に最も欠く可からざるの要務にして余儕か辨論を費すに吝あらさるも亦是を以てなり。

姫かゞみ

美妙齋主人

ふくさづゝみ　第一回

秋の癖とて天が凸凹の雲で不手際に掩はれた工合は下手な經師屋が半直段で張つた天井らしく、風は嚢の口を閉ぢたか、小萩の露が些しも落ちない。　人柄に忍んで來る木犀の香は窈と鼻の障子を開けて眼神經に捕へられ、勉強家めかして居る蟋蟀は休ますにまた嘯て居た。　肌合が何となく快い味は實に秋の專賣物サ。　美妙齋も先程から一人で机に向つて居た。　處へ面會に來た貴婦人が有つた。　美妙齋はまだ此人と近付で無かつた。　初對面の挨拶で其名を聞けば春香園子と云ふ相であつた。

倩觀れバ此貴婦人、年齡ハ二十一二であつたらう、顏は可なりであつたが肌理の疎いのが玉に瑕で、統計を爲たら今迄費した黒砂糖の斤數が威張ッて算盤の上に出て來るだらう。　手指は無上に太くて、一寸押したら水でも出るかも知れない。　歹く勘へれば水仕奉公を仕た成の果か。　最初美妙齋の眼に注まッたの

も凡此位の處で其人品は猶分解らなかッた。其内に可愛らしく口吻から蚊の啼く樣な聲が漏れて來た。

「斯う申すと何やら變な御無心で厶いますが、如何でしやう御聞濟になりましやうか。其も外でも厶いませんが、あのいらつめに御載の小說、大層御美事に出來ても居りますが、女子敎育の雜誌に如彼樣な物を御載になる事も些……それも那雜誌が敎育專門の物で厶いませんければ何も兎や角申す程の事でも厶いませんが……實に那小說とていはゞ時弊を寧破らうとの御決心で御書きなすッた相で厶いますのに、斯う申すのも太甚美術の道理を知らない樣で御耻しうも厶いますが、先輿論も大抵左樣な物です。美術家の眼から見れば世間に「美で無い物も無い相ですが、敎育家の眼から見ればまた其處に種々な仔細も厶いまして……斯んな事をば申さないでも宜しう厶いますけれど……其故に些其邊には御氣を御注めなすッて。妾も諄々とは申しません。其代によろしく御推察を願ひます。如何で厶いましやう」

言方も巧で無かッたが、併し言葉の尾が消えて仕舞ふ樣な不体裁も無く、それ

でまだ中々静寛であッた上、議論までが餘程面白かッた故、美妙齋の眼も自然と圓くなッて思はず此人の顔に向ッた。

「成程一應御尤な御説です。矢張り間接に奨戒する手段よりは直接に爲る方が宜しう厶いませうかネ。」

貴婦人は何とも返答しなかッた。美妙齋も漸く這方の應答が了ッたのに心注いた。

「否十分承知致しました。御忠告忝く存じます。最う小生も何も申しません。」

「夫では御聞済なすッて下すッて。諒に此上の喜悦は厶いません。御不滿足では厶いましやうが、是も社會の義務でせうから。いづれ全篇脱稿の上御出版になりませうのを御待申して居ります。就ては差出がましい様ですが、此後いらつめには何を御掲載になりませう。」

「まだ何も厶いません。」

「一ッ事實が厶いませうが御考にもなりませまいの。」

「へー事實に因りましては」……

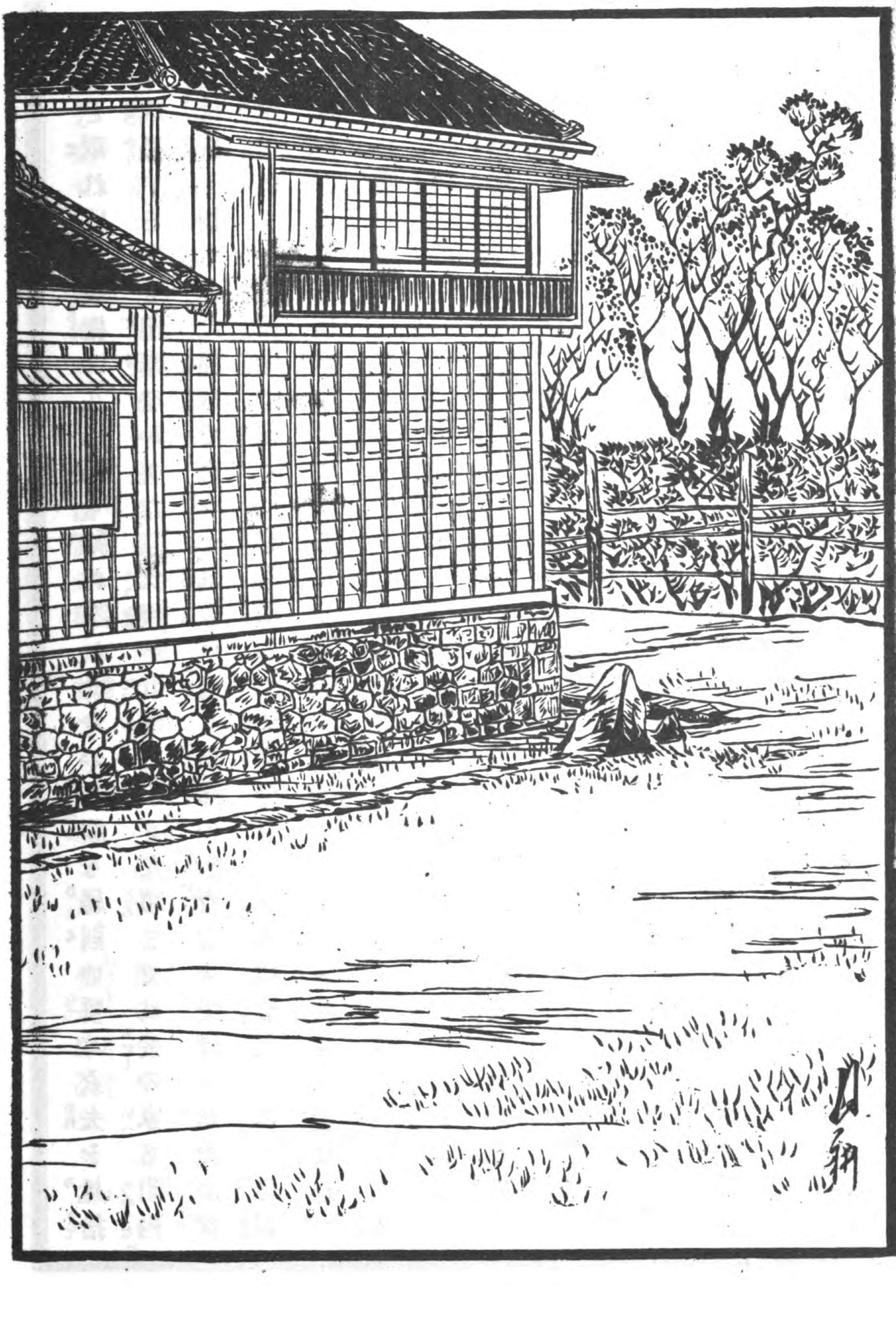
貴婦人の樣子ハ此處で俄に變はッて來る重力が殖えたか、眼ハ下の方を向いた。 時候が秋の故か、顔に紅葉が散ッた。 暇と云ふ先鋒が幾度も喚出された……喚出された、無理ゐ。 微笑と云ふ涙が些しづゝ口の岸に寄せて來た……寄せて來た、寂し相ゐ。 是ハ内心よ「極りが歹い」と云ふ考が芽を出しゝ證據であッた。 夫から凡半分はどと無言と云ふ物が舌根を縛ッて口の獄屋よ入れて置いた。 其内に「無言」の權威が衰へて來て舌と中で暴出した。

「改まッて申すのも御恥しうムいますが、實ゐ妾の身上よつきまして種々込入ッた物語がムいます。 御話申すも長い事……只今より四年程前」……

* * * * *

其時ゐ妾は十七であッた。 世間の娘小供は流行物の奴隷とあッて兩親を苦ませる年頃だか、妾の父親は去年の暮から以來今年の夏の初まで枕ゐ就いて居る事ゆゑ夫で無くても寛裕で無い活營が猶煎詰まッて仕舞ッて何一つ買ふ事も出來なかッた。 母親と一途よ妾も内職などを一生懸命ゐ稼いで辛く其日の活計を立てゝは居たが。 何分活計が思ふ樣でも無かッた。 妾が奉公でも爲て

給料を取れば些は樂になるかも知れなかッたが、母親も孱弱い質ゆゑ夫を見捨てゝ奉公する事も出來なかッた。父親が壯健であッた頃までは妾の家も町内で些は指を折られた商家であッて、其頃ハ妾も相應の敎育をも受けて居たが父親が煩付いてから番頭が惡くて家を潰して仕舞つた……婦人の悲しさには母親も妾も何する事も出來なくて仕方なく裏屋住となッた……無論其日に追はれて居た年ハ暮れて春になッた。それでも病氣は直らなかッた。春は目出たく床を揚げて雜煮でも祝へるかと待望んで居た甲斐も無かッた。其中に夏になる……病ハ舊の儘であッた。口惜しい近處の者が馬鹿に爲た。病人ハ夫を見聞して愈々焦燥ッた。それを見てゐる妻子の心……「あゝ何したら宜からうナア。」蚊が出ても蚊帳は無かッた。折角スヤスヤと寐就いた病人をマア……何だらう……螫まして恐い夢を見させる病人は眼を覺まして仕舞ふ夫樣すれば互に愚痴が出る愚痴が出れば六の袂が乾かないけれど啼くのも忍聲……其苦しさ世の中に貧ほど強面い物も無い。妾とて些は敎育を受けた身ゆゑ異逆に物の道理を知らなくも無かッた。それで居ながら凡夫の妄念……鴉啼が氣に掛ッたは夢見が心配



十二



の種になッたり。……思直して見たり、思入ッて見たり。……何うして何うして其時の心持と中々述盡くせる物で無かッた。阿爺さんの寐顔を見て阿母さんはボロボロと涙を流す……御傷わしい。實に金が欲しかッた。

妾の家の近處にある女學校が有ッた。其處へ通ふ女生徒も幾許も妾の家の側を通ッた。皆美い着物を着て居た。其處が凡夫で夫を見れば妾もまた羨ましく思ふ心も出た。けれどジッと諦らめて居た。只此時に毎も毎も妾の胸に浮かんで來るのと「あの人たちと御壯健な兩親を持つて居るのだらう。運が佳いナア」などゝ云ふ考ばかりであッた。

其女學校へ通ふ女生徒の中で毎も欠かさず通る人が有ッた。欠かさず通るだけ妾も其人の顏を見馴れて想像でも呼出せる程に覺えて來た。其人の齡と妾と仝ト程らしかッたが身体が花車だけ年弱く見えた。顏色と桃花の樣な薄色で鼻と口との恰好の好い事と本當に美術家の模範となる程。一寸言へば高尙な顏容でと無く、只美しい方であッた。けれど艶めいても居なかッた。一日妾が外から物を買ッて歸ッて來る途で不圖また其人に行遇ッた。那人では何心

無く行過ぎる。婦人の癖とて妾も夫を振返ッて見た。其機會に其人の懷中から小さな包……縮緬の……が落ちた。それを知らせバ宜かッたのに、今更話すも愧かしいが、妾が……此妾が……ヽ、それを知らせなかッた。左樣すると自然と首が前後を振返つた……すると四邊に人が無かッたので我知らず手の筋と肉が動き出して其包を取ッて懷中へ入れた。胸も酷しくドキドキした。取ッた上で「あゝ歹い事を仕た」と思つたが、まだ決斷が鈍くて最早何うする事も出來なくなッた。

第一回の上(非譯文)

まあがきッと　　樵耕蛙船

美人の天氣、處女の風と詩人は眺めたりにけむ。春の景色は麗朗なる。天も縹は薄衣に花は香を炷籠めつ、風も温める眞綿の如く面を吹きて寒からず。」園は廣さも如何ばかりか、只見る撰りに撰まれたる草木を其處此處、植做したるに花さへ今は盛りとて己がまに〱發きたれば四邊は宛然繪の如く花の褥にあらぬは無く、花の籬にあらぬは無し。見返れば色を衒へる薔薇、見亘せば蝶に散る李。「雪花亂撲を佛前の燈。」……李花亂撲を行人の面。面のみかも鼻も撲たれん。

鼻のみかし腦も撲たれん……心も撲たれん……眼も撲たれん。とばかりだにも愛でたきに據て丶加へて其處此處を飛回りつ丶蜜を取る虻の聲々長閑なる、繪に見る仙人の住む處もかくやと思ふばかりなり。

木立の那方に建てられたる館は常の物ならず、まだ人造の修飾も進まざりし頃ながら猶その時代に比べてはまゝ後れたる建築風にて、日燒の瓦色も黒ます、胡桃の扉も清氣なる窓の邊り色種々の貝類をもて飾りし模様流石に光輝きて閃と（？）でも其世の貴人が住處なりとし知られたり。そも住む人し有りや無しや寂寞として人語も聞えず枝を穿ちて唱ひ飛ぶ蟲と鳥との其外は渾べて無聲の支配地にて、見る眼に休憩を與ふるのみ、霎時は音も無かりし程に、只見れば倏忽那方なる扉を徐と開かせて稍、立ち出でし人のあり。白リンチンに薄紅の隈を輕く付けたるに茶黄鼦の縁を加へし衣を裾長う被りつ丶、孔雀石と紅玉もて組合せたる菊花を冠の横に飾したる、眼は潤ひて千金の愛敬を罩めながら猶豁達の氣色を備へ、口は結びて百年の生命を殺ぐに足りながら又勇ましき味を含みつ、連れたる侍女どもよりは遙に優りて見えたる有樣天晴館の妃子と見しは僻眼

か……僻眼にあらず。是ぞそなハち其名をば「まあがれッと」と呼做しつ、此處「ぶりてねん」の國主なる「もんとふおると」の夫人なり。後の世までも聰明なる夫人なりとの芳名を轟かしたる其人とて姿も美にして艶ならず、男子を迷はそ色は無くと男子を奨ます姿なり。今しも外に立出でしは國の景色を觀るためか詢は然らず胸の裡なる苦悩を散らさんためのみなり。されど其体顔の上あさしも現然とは見えず、僅か言葉の節々ふ其氣色のみ殘れるは流石ふ胸の廣がりける人なりと見られたる……國よ出來つ、隷從ふ侍女どもを顧みて「まあがれッと」は眉を寄せ、

「こや、見よ是なる薄茶の薔薇を。申そも畏き事ながら這は汝達も知れる如く吾夫が世ふ秘藏れ鍾愛。かの「ふひりッぷ」との戰ふ立出でたまふ其折しも朝の露よ御裾の濡るゝも更よ厭とせ賜とず」………

「現よも仰よ侍るうし。此傍よ稍ゑばふく立させ賜ひて這方を見返り………

「然よ。見返りて吾もまた此薔薇の如く、榮えつゝ名譽の芳世よ傳へ、かの(ふひりッぷ)よ打勝ちて愛でたく凱陣なそべけれ。薔薇よ汝こそ此身の紀念吾よ、吾

こそ薔薇は兄弟。雨の箭玉に打たれなせぞ。箭玉の雨に打たれなせぞ。花咲く春もあるものぞ。やよ、これ此身が秘藏の薔薇、やよ、これ「じよん、ど、もんとふおると」と御腕をも打振りて。」「さて出立させたまひしに今に至りて二年の月日を經たれどいまだに歸らせたまはず、」「薔薇もかばかり榮えつゝ四邊に花も無き迄に獨秀れて立つものを主も未だに旅の空、」「劍枕に戰屏風。國の爲とて千金の御身をだにも厭とせず、雨に沐浴し、風に息吐き、苦患を受けさせ賜へるを思へばかくて安穩に日を送るだに最も最も勿体無くこそ侍るなれ。」

家政要錄

食物の購ひ方

家政記者は前回の紙上に於て食物の購ひ方に付きて一の問を掲げ第四號の

發兌まで沈思せられんことを讀者の方々よ望みたりき。然るに右發兌后二週間にして記者ハ山家さと子と呼べる君より一の郵信を得たり、則ち前回よ掲げたる問に付てその經驗を書されたる最も有益なるものにして、而も記者が言ハんとする處のものと略同じきを以てこれをこゝに掲げ、前約の言譯とハなしぬ、

「一筆示し上まゐらせ候。食品の購ひ方ハ家政の調方にいとも大切なることゝ存じ居り候折柄はやくもいらつめの紙上よ御批露されし御注意の細やかなるにハほとく感入まゐらせ候。私ことも兼てよりこのことよ付きて彼是心配も仕り聊か氣付き申せし事も御座候まゝ、いとも嗚呼がましき業にハ侍れども山婆の實驗話もまた御一興と存じ取あへず左に二三箇條書き認めまゐらせ候。

金錢を用ゐる事の難き所以ハ之を費す事の難きにハあらずして、善く費やすことの難きなり。市場に出でて食品等を購ふも中々六かしき業にしてまづ第一に智識と經驗の大切なることと云ふを待たず。

第一。先見を要す。家族の健康を得んにハ規則正しく家族を養ふこと大切なり、今日ハ滋養に富めるものを食し、明日ハ粗末なる物を用ゐるがごとき

ことあるべからず。其家族の有様に應じて相當の滋養物を日々に同様に用うべし。左れば家政の司にあるものは家族の數に應じて入用なる食品の見積をなしさて其上にて過不及なきやうに之を買ひ調ふべし。則これが爲には來週中の献立を前より造りおくべし。かくのごとくすれば食物調理の順序其宜きを得るとまた一には時間の節儉を爲すこと甚多し。右のごとく献立を造りて何物を求むべきかを確と定めたる上市場に行きてこれを求むべし。勿論己が要する所のものを悉一時に購ふも宜しからざることあり、就中暑中の候に在りては腐敗の恐あり、然れども預此か彼かなど積りおき、時に臨みて其都合宜しきかたを求むべし。

第二。智識を要す。諸種の食物を用うべきことは明なる事なり、故に家政の司に在る方々は諸種の食物の性質などを知りて宜しき樣に組合すこと大切なり。如何なる食物は熱を生じ、如何なる食物は肉質を生ずるや、少年には何、老人には何などのことを考へ、其入用大切なるもののみを求め毫も不用なるものに金錢を費さざるやう心掛くべし。尤食品は其數甚多く、同一の功

用をなす食物も其數頗多ければ、諸の食物の性質など明に知るに於てこそ時候に應じて適當なるものを得んこと難からず。〔今日は不漁なり〕など云ひて野菜物のみにて膳部を調ふるがごとき、これ燃えざる薪を以て水を熱せんとするがごとし。

第三　經驗を要す。　市場に行きて食物を購ふに其品質の可否を見分くること最大切なり。　たとひ元來はよきものなるも其一旦腐敗に近けば却て劣れるもの新鮮なるに若かず「腐ても鯛なり」など云へける諺言は之をこの場合に應用すべからず。　これらの智識は之を實驗によりて得るより外はなし、唯これらのことを他人に委せず自から之を爲せば自其經驗を積むに至るなり。

右は唯其一二を認めたるのみに候まゝ、如何樣にも御取捨下さるべく候尤私こと兼て右の敎を得てよりよしや車に乘るとも買物にゆく樣に日々種々と心掛申し候ひしに今日にてはまづ大方は臺所向の事順序も相立ち候樣に相成申候。　御同樣に家政の司に在るものはこれらのことを相覺え申候こと中々

に大切に候、ま丶此上ながらよき考案なども貴社へ御通信相成る樣宜しく御披露下され候ハヾ幸の至にぞんじあげまゐらせ候　かしこ

下女下男雇入の期限。

從來の習慣によれバ下女下男雇入の期限ハ多くハ四ヶ月、六ヶ月、一ヶ年、なるがごとし。今これを實驗家にきくに、かく長き約束にても動もすれば雇主と雇人との間に於て不愉快を感ずることあれバ、約束の期限ハ一ヶ月を以て最適當なりとせり。蓋し右一月の約束なれバ雇人の爲にハ己の意に充たざる家ハ速に去りて他に宜しき家を尋ぬることを得べく、雇主の爲にハ雇人の性質其他に於て良からぬものあるを知れバ容易く之を解雇するを得べきなり。尤其一月の樣子にて更にまた翌月の雇繼を爲すことを得るなれば雇人にして長く其家に止まらんと欲せバ諸事丁寧に勤むべきなり。雇人ハ全く親族外のものなれども其雇はる丶間ハ家族の人々にハ最親しく接近するものなれバ双方に於て相信じ、毫も介意せざる程にあらざれバ家内の愉快を妨ぐること少しとせず。英京

「ロンドン」に於ても從前は多く六ヶ月の約束なりしが、今日にては皆一月約束の便を知り、專らこの約束によると云ふ。我國にても地方にありては格段なる約束にて數年の期限を定むるの便なることあれども、まづ一般には一月の期限となそこそ宜しかるべしと思はるゝなり

西洋料理方。

ソップ水にて肉の滋養分を煎じ出したる汁にして、其種類名稱ともに數多けれども概茶色ソップと白ソップとの二種に大別することを得。茶色ソップは牛肉を煎じて製し白ソップは牛仔の肉にて製するを常とす。大凡ソップを製するには鮮き肉と軟水とを撰むこと緊要なり且肉一斤につき水二升を加へ、初めは先烈火にて煮て泡を生ぜしめ、後漸次に火力を減じて久しく煮るを可とす。

茶色ソップの製方。

牛の股或は臀の肉一斤を四つ五つに切り若し骨附なれば骨を離し骨を割りもて骨髓を取り出し、其骨髓或はバタを鐵鍋にて熔し其鍋の内にて十分に肉を

焙るべし、但し肉の焦げぬ様注意すること緊要なり。斯く焙りたる肉を二升の冷水に浸し少量の鹽を加へて二十五分間放置し肉汁の冷水中に出づるを待つべし。次に胡羅蔔、洋葱、甘藍等を肉の鍋に入れ、文火にて大約五時間煮詰め、後肉幷に野菜を取り揚げて煎汁を冷し、汁面に凝固たる脂肪を除き去り毛篩にて滓を漉し取るべし。此法にて製したるソップは茶色にして透明なるべし。ソップは十分に脂肪を除かざれば味悪し。脂肪を除くにはソップを十分に冷すべきことなればソップは之を用ゐる前日に製すること常なり。

ソップを製するに用ゐたる肉は其滋養分を水に出したる遺滓なれば、既に食用に供すべからずと思ふ人もあらんなれども尚野菜、鹽、胡椒等と加味せば美味の食と爲るべし

前の方にて製したるソップは謂はゆるソップダシ、則右種の茶色ソップの原料なり、故に野菜若しくは温飩類のソップを製せんには唯之に温飩若しくは野菜を加ふれば乃足らん。又鶏卵をば冷えたるソップにて溶きたるを加へて用ゐることあり。

キドニーソップ。

牛の腎を切りてよく洗ひ、水若くはソップにて煮ること一時間、その後腎を取り出して其汁を漉し、腎を分て小片と爲し、再前の汁に加へて更に前方にて製したるソップを適度に加へ數分時間煮るなり。

ピヂオン、ソップ。

前のソップダシに鳩の肝及び胃を投れ大約半時間別に胡椒と鹽とを加味して鳩の腹部を包みたるものはフライ粉を被ひ揚げ物鍋にて少量のバタを以てあげ、ソップには少量のバタと小麥粉を混せて之を濃くならしめ、後ソップを漉して鳩を加ふべし。然る後ソップにて鳩を煮ること一時半にして直にソップ皿に盛るべし。

オックステイル、ソップ。

牛の尾の關節より切り離したるものを前のソップダシの中に入れて尾の肉の軟化するに至るまで煮て後少量のソースを加ふべし。

此ごろ社友が天野先生を訪ね、いらつめの爲に經濟學の通俗講話をせられんことを請ひしに、先生は直に机上に在り合せたる英國「マーセット」女史の經濟問答となんいへる書に付きて經濟學の何物たるやを講述せられされば社友之を筆記し先生の承諾を經てこれをこゝに掲げぬ。但し此書は問答体に作爲し甲乙兩貴女をして經濟上の對話をなさしめ其問答の間に經濟の道理を說明する樣仕組みたる者なり茲に掲くる所は其一部分にして殊に經濟學の何物たるやを談話する場合なりと知るべし

經濟學とは如何なる學問なるや

文學士　天野爲之講述。

甲。余は昨日以來經濟學のことに付きて彼是思考いたしたれどもいまだ大に得する所なく、唯却て前に余が此學に付きて考へたりしことの甚だ混雜たるものなりしことを發見せしにすぎず。まづ經濟學と云へば諸種萬般のことを論ずるものなるがごとしと雖も、何樣の學問なるぞと云ふことに至りては未だこれを詳にすること能はず。希くも經濟學の稽古を始むる基礎となるべき考を得んために簡單に其說明をきかせ給ふことも叶ひ申さずや。

乙、余嘗てきけることあり、左る貴婦人が或る哲學者に向ひて經濟學とは如何なる學問なるやを最も簡單に說明せよと求めたれば哲學者は答へて「貴婦人よ卿は家事經濟とは何事なるやは定めて知らるゝならんがこの一家族の經濟に付きての考を一國民の上に推し擴げ給ひたらんには經濟學の性質に付て多少發見る所もあるべし」と話せしと。

甲。この貴婦人は簡單に說明せよと求めたるがゆえに哲學者はかくもよく手短に答へしならん。しかれども余は彼の貴婦人のごとく氣短なるものにあらずこの學問のことに付きて今少しく詳しき說明を與へて余を滿足せしめらるゝことこそ余の希望ふ所なれ。

乙。經濟學は富とは何物なるや、富の產出とは如何、富の分配とは如何などのことを論ずるものにして則ち富の增殖を進め或は之を妨ぐる所の原因、及び富が社會の幸と不幸とに關係する次第柄を敎ふるものなり。

今それ野蠻の時代にありては最も僅なる人民が渺茫たる土地の此處彼處に散在をるにすぎず。河海の魚を求め山林の鳥獸を得て食料となし最も覺

束なき生活をなすことなれば風雨の爲めに漁獵に從事がたきことなどありて爲に食料を得ずして餓死するもの少からず、また子女のごときもまだ若年に至らざるに早く「乏き」と云へる敵に殺さるゝこと多きが故に子女を滿足に養育ること甚だ少し、また老年の人及び身体の虛弱ものは之れを殺害すを以て暴虐ことゝなさず却て仁惠のことなりとせり、何となれば漁獵の職業たるや食物を得んが爲には長き時間を費し幾多の危險を冒し或は川を渉り或は山を越え處々を奔走らざるを得ざるが故に老人虛弱もの等は壯年と共にかく危險なる奔走に堪ふること能はず、終に餓鬼の追ふ所となりて途に斃れ、或は猛獸の餌となること常なればなり。

これより一段の進歩を爲しその牧畜の事業に從事るに至ればその爲すべきことは家畜の飼料を求むるのみなればこれを前の時に比ぶれば活計の方は稍小區域の中に求むべくまた危險しき山川などを跋渉するの用なし。即ちかく家畜を食とすれば生活も自ら易きが故に親族も次第に增加し、人民の性質も大に進歩してまた昔日のごとく猛惡る性あることとなし

これよりまた更に一段の進歩をなし、農業耕作の技術を知るに至りては小き地方にても能く多數の人民を養ふことを得るが故に、食物を詮索むる爲に處々を驅馳ることは全く其要なく、各族皆一定の住處に止り、從て社會的の生活を始めんとするに至る。

野蠻時代に於ては政府など云へるもの曾てあることなし、左れば人民は誰の支配を受くると云ふこともなく唯戰の始まりたる時には戰將に附屬して其指揮を受くるにすぎず。

この牧畜の時代に於ては諸人各牛羊の群を飼養て之を所有せるが故にここに於てはじめて身代を生ず、既に身代を生ずれば之を保護するに法度を設くべきが故にこれらの酋族中の長者たるもの法度を作り、之を犯すものを罪人とし或は之れに刑罰を課る。これ則ち社會の秩序の始りにして、これより第三の時代に於ては人民たるものは皆確定る場處に止り、法度は次第に整頓て王政或は代議政などの有樣を爲すに至る。世の中の有樣こゝに於てまた前日の樣を改め、工業盛に行はれ天物の形を變へて人類の用に供し技術大に

興りて人間の生活を便にし、金銀鐵などを用ひて入用なる器物を製造し、また勞働のことハ次第に小き區別に分れ前にハ一人にて家をも建て壁をも塗りて之に住し、自ら織りて衣、自ら耕して食ひしも、今ハ各其業を分ち家を建つるハ大工のこと、壁を塗るハ左官のこと、衣服ハ織屋之を爲し、耕作ハ農夫之を爲す、故に各其分任の業務に熟練て家を建つることハ左官ハ大工に及ぶ能ハず、壁を塗ることハ大工ハ左官に及ぶこと能ハず二者各相待て大に利益を得るなり。かくのごとき順序にして蒙昧ざる野蠻人ハ遂に開化の民となり、耕作の事業ハ益進歩て、廣き道路ハ富榮たる市街と市街の間に通じ、家と家、市街と市街、國と國の間に於て甲に有りて乙に欠けたるものと乙に在りて甲に欠けたるものとを相交換し、所謂交易のこと行ハるゝに至るなり。（以下次號）

雜録

ぎよわん、だ・わく（貧居の塲承前）。

遮莫濁世に生來て　五塵の中に在るからハ　彼の六窓の獮猴自物、

煩惱無きそ人ならず。
斯る活計に世を詫びて
闇に燈せる篝火の
心の張も挽まずに、
我子の樣を見るにつけ、
タツの都に鮫人の
〔去よあん、處女が最たう
然り迚あまり凝りもせば
厭そで心ひそむるを
些しは寛ぐてこそ好けれ。
妻も此身も嬉しさに
せめて此子に歳々を
語合ひつゝ… 年毎に
今買ふ物にあらねども、

稍物心附きさりし
墓無く過ぐる身の程ぞ
細き煙をもしはぐさ、
晝の疲勞も厭そずに
父の心ハ傷そしさ
啼きしも斯と思ふ迄
書を好むそ露程も
病や出んと思ふにぞ、
見れば流石に親心
とそ云ふ物の味氣無や、
〔是より後は日頃にも
美服衣せて人並の
都よりして下來る
只心のみ急がれて、

娘を有てる甲斐も無く
鵜河を渡るのつら人。
辛く手束の眞桑弓、
書に眼をさらすなる
マシらと共に腸を
落つる涙を搔拂ひ、
惡き事にハあらねども
然迄に晝の勞傭をも
最も安うハ非ずかし。
和女が生れたりしより
優りて業を勵みつゝ
敎育を爲さまほしゝ抔
旅商人に逢ふ毎に、
時の流行を問尋ね、

〔現に其模樣最好のれ。
かならず之を購ひて
拭ひもあへず諸共に
引延ばしたき身代も
響かぬ處無きになん、
錢も倏忽無くなれば
耻づれど甲斐も難波草
頃としなれど猶いまだ
巴里に上せて然るべき
其事さへに得叶ず。
食ふては動き動きては
可愛や、和女が斯迄に
薄かる故と言ふものから、
手助を爲そのみならず、

我子にはよく似合ふべし。喃、妻、次の年こそは
娘に着せめ」など云ひつ、それ樂にあぶら汗
身を働かす錢ぐるま、稍掛初めし棉ともに
延びぬ折には延びぬ物、折から國の噪がしき、
物の價値は廛の羽のやがては些少溜りにし
望の的は首尾好くも手套と倶に全徑。
アッキ運ぞと喞つのみ和女も今は十と云ふ
師匠取らせて讀書を學ばす事も得叶ず、
處に仕へまゐらせつ、都の手振習せする
さるを況てや美服をや。唯々親子水入らず
食ふて其日を小車(送間)の環會のいと惡き、……
力のあらぬ親の子と生れたりしも亦運の
さても怨める樣も無く、年齢も行かぬに父母の
夜をしなれば其如く書を閲して餘念無き

胸のさがしさ愛らしさ　見れば、思へば親甲斐の　無き此身こそ薄情けれ。
吁、薄情やと打なげく　聲さへ曇るなみだ雨　見せじと物か紛らして
顔を燈火に背くれば　また憎らしや、久方の　月よ憂をもシヲま弓、
ハルかの天に冴えつゝも　光も窓の隙漏りて　愁顔をばてらそなる……

（未完）

白粉傳法の沿革、其害、其性質の奇なる事。

白粉(昔は「しろきもの」)の名は長明の四季物語にも見えたれば流石に近頃の語にもあらず。其頃には如何なる物をもて製せしが詳に知るに由なけれども先後々に至りては鉛をもて製する事となりぬ。素より婦人が顔を白くせんがためにに白き粉を用ゐるは我國とて西洋とて美を愛づる心より變はりたる處なきものから、さて是を用ゐる事終に一種の流行と爲りて見す〳〵白粉を用ゐしと明白なるをも顧ずして強ひて用ゐし事などありしは頗奇なりと云ふべくなん。西洋の例は措きて問ハず、我邦の如き、幕府天下の權を取りて太平日久しき餘澤

とて驕者の風もやうやく强く、因りてまた白粉の如きも竟に女子の粧飾の中にて必要の物となるに至りけり。されど白粉を用ゐる事純全たる流行となりて上は御殿の人々より下は裏店の少女に至るまで之を用ゐざる事無き迄の勢に立至りし程に前の粧飾として人造の麗質を作りし物も今は全く左にあらで寧美を粧ふにあらず、白粉を粧ふといふ有様と爲果てつ、異に顔を美くしく爲すためならば、之を塗るにも適度を超えず、天然の肉色を薄く仄めかして匂はすべきに、其頃は夫と反對にて所謂粉屋の泥棒てふ比喩をさへ生ずるまで厚やかに塗做して面も故に襟足なんどを附けて白粉を際立てたり。御殿女中なぞに於ては此風殊に甚しく、時には鉛分の最强き舞臺香などをさへ試むるに至りつゝ、其極皮膚を疎くして又色素に不平均をも起さしめ、老年の後に及びて始めて其大毒なるを知り及ばぬ後悔を爲す事とはなりけり。

（未完）

人を訪ふの心得

交際の要は人をも樂ましめまた己も共に樂むにあり。人を訪ぬに交際に慣

れたる者を除くの外は往々交際の仕方惡きがため大に先方の心を損じて吾人の不愉快の種を蒔く事はなはだ多し。經驗ある人へいざ知らずまだ世途に熟れざる妙齢の人に於てはあらかじめ交際の心得方を覺えてその規律に從ひ適當取捨する處あらば他人にも愛せられまた自己にも大なる愉快を得る者なり。

さて妙齢の人にして人を訪ふに心掛くべき秘決極めて多し。出來る丈さきの氣に適ふ樣にわが身を處置すべし。何事によらず主人夫婦の望と便益とをはやく推知せんことを心掛くべし。他人に迷惑を掛けぬ樣斷えず注意すべし。先方の家風を能くわきまへてそれに背かさらん樣深く注意すべし。時間を堅く守りて違はざる樣すべし。時を嚴しく守ることは淑女の令德中最も大切なる者にて又違へ易き者故格別に注意すべき者なり。わが尋ねんとする人は何時ごろ多忙しきやらん何時より出掛くべきやと思ひ定むる事肝要なり又尋ねての後去るべきの機を捕らゆること是又極めて必要なり。

音樂を學ぶに付きての注意。

唱歌及び奏樂の規則を書き立てんとするは無益の業なり。師に就て習ふの外道なし。されば爰に言ふところは只和洋の音樂を學ぶに必要なる心得のみなり

音段(Scales)及び總べて指の稽古になる者は怠らず學ぶべし。されど世間には毎日數時間つゝ機械が働くと同じ樣に只管稽古さへすれば何事も出來るがる者なりと確く信ずる人あり。是れ恰イロハの復習を毎日の業としてその讀誦の早からんことを勤むると同じことにて、淑女諸君は決して斯くの如く無用に時日を費すことあるべからず。

樂を奏するには必其時を定め、勤むるときは勤め、休むときは則休むべし。世間多くの人の樂を奏するは恰酩酊したる人の道を歩むに似たり。諸君は決して此の如き所爲に傚ふべからず。

氣の向きたるとき和音(Harmony)に關はる緊要なる法則を學ぶべし。初は六かしく思はるれども追々慣れて之れを實地音樂に應用するに於ては云ふべからざる愉快を得るものあり。又和音の道理を知らざれば上等の音樂家とはな

り得まじ。
樂器の絲又は押板(Keys)を徒にザラザラッと鳴らすなかれ。常にわが赤心を以て樂を奏すべし。決して一段を二度三度に分ちて奏すへからず。
樂を奏そるに早きも遲きも其度を過ぎれば共に大過失なり。
わが奏し易き物を撰んで過誤なく心地よき樣に奏せんとを常々心掛くへし。六かしき物を中出來に奏せんより遙に勝れり。
常に調子の能く整ひたる音色よき樂器にて樂と奏すべし。不快を覺えわが聲を損するの恐あれバなり。
歌を指にてのみならぞ　樂器なくとも唱へる樣心中にても諳すへし。歌の調子ハ心にあきらかに浮出さする樣心を錬るべし。
奏樂の中に誰が今聞き居るや杯に必掛念すべからず。敎師わが傍に聞き居ると思ひて奏樂すべし。
わしき聲の者とても諦ら免ず樂器なしに唱歌することを學ぶべし。よき朗なる聲の者ハ一分時たりとも之を磨くを猶豫すへからず。玉磨かされば光な

しその金言を忘るべからず。

金蘭會新作唱歌（寧樂之都）

鳥井忱氏新作

綿あやおる、秋萩の、花もまのごろ、さきぬらむ、」秋の野の邊の萩が花見に、吾妹子、萩が花見に吾妹子、いさやゆかむ、」妾はゆきてむ、今日の團居に、けふの團居は、深き契の金蘭會。

深き契の交際は談あふだに、面しろや、」けふは況してや、殊に妙なる音樂、殊に巧の演説いざやきかむ、」吾背よ何如に……あそれおもしろ、今日の團居や、秋の野の邊の、萩か花見に、まさるらむ。

講義

日月地の大さと距離の話。

理學士 鮫島晋 講述

およそ物の大さハ目で見た計りでハ分り難し。試みに事物の理に暗き小供に向ひ、天にある諸の光体の中で何が一番大いかと問ハヾ日か又ハ月なり、他の

星ハ皆甚小しと答へん、又日と月とは大抵同し大さにておよそ四寸か五寸位の直徑のものならんと思ふべし。これハ至極尤な考へなり。されど又物の道理を少しく辨へた人ならば必小供の考へが不當なることを信ずべし、何となれバ物ハ遠く隔るだけ小く見ゆると云ふ事、日やその他諸の星ハ總べて地球を去ること極めて遠き距離にあること、日ハ月よりも地を距ること甚遠きこと等の事實なればなり。

さて物を見た處での大さハ視角とて人目より二本の直線を出しこれにて物の上下若くは左右の端と端とを夾み、この直線のなせる角の度の大小にて物の直徑を判斷するなり。されバ同じ角度にても物の位置によりてその大さの限りなく變化するものなり。日と月とてもその實大さの甚異なるものなれども距離の割合によりて始同じ大さに見ゆるなり。この理によりて物の眞の大さハ距離を知らず視角のみにてハ憶測しがたきこと明なり。尤もわれわれの實驗上より考ふるに距離を知らずとも物の大きさの知らるることあり、例へば遠方より人又ハ家を望見してその高さのおよそ幾ばくなるかを知り、或ハその近傍

にある諸物の大きさを判斷して大きな間違のなきが如し。これはわれわれが人や家の高さを通常幾ばく位なることを知るとこれ等の大さの定まりたる物にその近傍にある物を比較することを得るが故なり。かくの如く憑據が絶へてなき場合(例へば天にある星の如き)には物を見た計りでその大きさは決して分らぬものと知るべし。

星の如く極遠の處にある物の視角は甚小きものなり。今先づ物の直徑とこれを見る距離との割合に照らして星を見るに要用なる角度を算すれば左の如し。

直徑。・・・・・・・・一尺。
距離。・・・・・・・三千四百三十八尺。
視角。・・・・・・・・一分。

一分と云ふ視角を目前の一例につきて考ふるに、頭髮の大さを直徑にて三毛ありとせばこれを一尺の距離にて見るときの視角は即一分に當るべし。

日月の視角を測るに日の視角は平均三十二分、月の視角は平均三十一分なり。

地球の直徑を單位にして日月の直徑を測るに、日は百十二、月は百分の二七、即殆どその四分の一あり又同じ單位にて地と日月との距離を算すれば日は一萬二千、月は三十なり(四百と一の比例)。

かく天文學上の成積を數のみにて示しては少しく會得し難き恐あるゆゑ次の如き方便を以てこれを說かん。前に述べし頭髮を一尺の距離にて三十一二本併べ(一分程の幅)日又は月の方に向けてこれを視角の內に入るるときも日月はこれがために全く蔭れて見えぬやうになるべし。又日食に金環食(極めて細き日の環が顯るる日食なり、本年の日本の日食は皆旣にして金環食にあらず)と云ふことあるは月の視角が日の視角よりも少しく小けれどもその差は僅かに一分位に過ぎぬゆゑなり。又假りに地球の直徑を一寸としてこれに日月の大きさを比較するときは日の直徑は一丈一尺二寸に當り、月の直徑は二分七厘に當る割合なり。それゆゑ日月地の三体を一處に集めて比較せば丁度八疊の坐敷の四隅を切り去ッたよりも少しく狹き位の圖畫の上にミカンとキンカンを置くが如く、圖畫は日にして、ミカンは地球、キンカンは月なり。又かれとこれと

の距離を正しく定めてこの三体の位置を考ふるときハ圓臺の中心より一千二百尺即三町二十間程離れた處にミカンを置き又そこよりいづれの方向になりとも三尺の距離にキンカンを置くべき割合なり。かく位置の定まッた處でミカンよりキンカンを見るも圓臺を見るも殆同じ大きさに見ゆることちやうど地球より月と日を見るに異ならざるなり。

今こゝに一寸と假定したる地球の直徑ハ眞に幾ばくなるかを考ふるにこれハおよそ三千二百里餘なり。さてわれわれが常に大きなるものと考ふる山の中にてヒマラヤ山ハその高さ海面よりおよそ二里餘なり。三千二百里を一尺にて顯すときハ二里ハ六毛に當る、一尺直徑の地球の上にハ六毛の山を造ること甚困難なり。又二里即二萬五千九百二十尺を一尺にて顯して人の身長(五尺と定む)をこれに比較せバ二厘とある。二厘ハ小さき蚤の身長に當るべし。高さ一尺のヒマラヤ山に對すれば人の身體ハ蚤の身体に當り、直徑一尺の地球に對すればヒマラヤ山ハ塵の如く、直徑二間の日に對すれば地球ハミカンの大きさに當る。されバもし八疊の坐敷の内を日の入るだけの廣さとせば人の身体

の大きさハいかなるものに比較して相當なるか實に想像の出來ぬ程小さきものなるべし。

又日と地球との距離の大なることを證するにもし地球より大炮を放ち、その玉が日に達すべき時を計算せバおよそ十七年を要す又一時間十四五里を行くべき滊車なれバおよそ三百年、又一時間に一里を歩行すべき飛脚なれバ四千五百年(但し晝夜兼行とす)を要すべし。四千五百年と言ハゞ日本神武天皇より二千年計り前即神代の時代より今日までの年數なり。かくの如き距離ハ地球上の人の生活の有樣より言ハゞ實に驚くべき事なれども世界の限りなく廣大なる處より論ずればこれは尙甚些細なる事なり即天文學にて既に人の知りたる星の中には日よりも何億萬倍も遠き處にあるものありと云ふ。左に日、月、地の直徑及び地より日月に至る距離を日本里數にて概算したる成蹟を示す。

地徑・・・・・・・三二四二。

月徑・・・・・・・八七五。

日徑・・・・・・・三六三一〇四。

月距・・・・・・・・九七二六〇。

日距・・・・・・三八九〇四〇〇〇。

肺病の話　付新發明呼吸器

醫學士　竹中成憲講述

追々寒に向ひますると兎角肺病といふものが起ります此病は傳染もし遺傳もし其上に不治病でありますから、これほど恐るへき病はムりません。そこで此病に取付かれてからは後の祭ですから、取付かれぬ工夫か肝腎であります。近年醫學の研究が届きまして肺病ハ虫(バクテリヤ)より起るものといふとか明白と分りました。肺は皆様御存の通り氣管より續きたる二ッの大きな伸縮する袋様のものであります。呼吸を致しまする毎に外より入る空氣は氣管より氣管支、それより肺に入ります。又肺の中より出る息ハ此反對の順序によりて外に出ます。肺病人の吐いたる痰の中には此虫が幾万となく居ります。この虫ハ極めて微少ものにて何百倍といふ顯微鏡にて放大し其上着色して見ますると〳〵形をなして居ります。是ほど少き虫でありますから痰か乾きますと空氣中に飛散する

とは自由です。肺病患者の息及び病室中には幾許となく飛散して居りますから病人の息を嗅ぎ或は病室の空氣を吸ふときは此虫が肺の中へ這入つて參ります、そこで其人の体か健康でありさへすれば虫は肺中で死失せますが、柔弱なる人でありましたならば、此虫大に威を逞うし、肺の各部に蕃殖を計るとなります。これが即肺病で傳染るといふもことであります。一旦取付かれた日には生命を取らるゝ迄は治りません。世間には肺病も治るといふ醫者がありますがそれは全くの虛言で若治れば肺病でなかつたので醫者の誤診です。又此病は遺傳病じやと申しましたが大抵此病を患ふ人は其親か或は祖父母兄弟姉妹に此病を患つた人があります。しかしながら黴毒の様に病が親より子に傳はるものではありません親が肺病人ならば其体の虛弱といふこと丈が傳りますので、言はば肺病を患ふ下地を生付けて貰つたといふ位のことであります。此事に付きましては西洋人も屢試驗をしたことですが、眞逆人間で試驗をするとも出來ませんから、肺病の痰を細かくして色々の動物に吸はしまして二週間の後解剖して見ましたれば、肺の中は申迄もなく腸に至るまで肺病と同様なる病狀がムりました。

これで大概肺病の傳染のと遺傳譯と其恐るべき事ハお分りになりましたらうと存じますれば、これから取付かれぬ工夫を少々申上ませう。何分にも体の虚弱なる人ハ感染り易きものでそから体を健康にするとが第一です。就ては此病の誘因となるものハ風邪と胃病です。風邪より肺病に變じ易きハ皆さん御存の事でありますから風ひかぬ樣に用心するると肝要です。胃病は健康を害すると、甚しきもので兎角弱身に付け込むものですから胃病を煩はぬ工夫が肺病豫防の間接の手段であります。胃病の起らぬ為には暴飲食を愼むのが第一であります。又風をひかぬ為には膚衣は夏冬ともにフランチルを用うるとが最良法でありまス。又氣管に通ずる通路は口と鼻と兩道ありますが、口より呼吸いたしますと外部の寒冷ん空氣が直に氣管に入りて自然風邪の原となります鼻より呼吸しますると其患はありません。全体口は飲食をなし言語を發そるの職務を持てをりますから、其上呼吸までさせるハ甚酷でありまそ。鼻は匂を嗅く役目ばかりで其上呼吸をする工合になつて居りますから、鼻で息をするとは適當の事でありまス。先づ鼻で息をすると極めました處で、又一つ厄介なとがあります如何に鼻て

も空氣中の埃を漉す譯には來りません。此埃の中には前申した肺病虫がまじつて居りますから呼吸器を用うるとれ必要がムります。呼吸器を用ゐますと空氣中の埃ハ皆漉過去ますから肺病の豫防にハ至極必要でムります。今用ゐて居ります呼吸器は製方の甚面倒なもので時々洗濯もせなければなりませんが迚も素人業には參りません。その場合には買替へますか又は其職向へ持て參りまして直しをせねばなりません。其上價も貴うムりますから私が今度工夫をいたしました呼吸器ハ女子なら誰方でも造作なく出來まして且其効能ハ在來のものよりは確でござります。それハ黒八丈絹にて鼻と口を蔽ふ程の長方形の袋を造り其中に新しき綿を詰め四隅にゴムの紐を結びて耳に掛くる樣になすべし。是で十分の効能がムります。時々綿を入れ易えますそれハ何時までも用ゐられます。取り出したる綿には虫が居るかも知れませんから無暗にすてゝてハなりません。雪隱へ捨るか燒棄るに限ります。尚養生方に就いてお話しすることがありますがそれハ次回に讓りまして今日ハ是てお暇を致します

○東京金蘭會。仝第五回を去月廿三日北品川岡氏の別業に開けり、折惡しく曇り勝ちなる秋の日和にて會塲の少しく遠隔なりしにも拘はらず、來會せられたる淑女紳士百二十餘名に及び、數名の外國婦人も參會せられたり。午后二時頃より順次音樂取調所研究生幸田延子、林蝶子、木村作子、森富子、納所辨二郎、比留間賢八、山本生、諸子の管絃樂の數曲を催し、次に宇川盛三郎君は事實に徴して適切に文明の交際法を演説せられ、終つて會員鳥居忱氏の新作に係る金蘭會の唱歌荒木古童氏の尺八其他餘興等にて各々歡極りて散會せしは夕鴉の啼いて御殿山の森へ歸る頃なりき。今回は前回紅葉館に催せる時よりも庭園の廣きに任せクリッケット、ローンテニス等の戸外遊戯其外帷幕を圍らして飲食喫烟塲を設けられし抔勗めて來會諸氏に高尙優美なる交際を爲すの機會を與へられしものと見へたり。當日宇川君の演説筆記の要領は仝君に請ふて次號の誌上へ掲載すべし。

○通俗婦人講談會。去月廿四日午后より第二回を前會の如く麹町小學校に開き、色川國士氏の婦人の勢力、鶴橋國太郎氏の婦人の本務、醫學士竹中成憲氏の

肺病の話、石川米子の婦人智識の階梯等の演說あり。最後に此日來聽せられたる米人タムソン夫人簡單なる英語の祝辭を朗讀せられ、弊社の石橋助三郞此れを口譯したり。竹中氏の演說筆記は本誌學藝欄內に揭ぐ。

○東京婦人敎育談話會。　去月十七日富士見小學校に催されし、仝第八回は午后二時開會し、幹事木村貞子先づ立ッて規則改正の報告を爲し、次に木寺安敦、理學士飯島晋、大學敎授緒方正規、華族女學校勤務色川國士諸氏の演說ありて、午后六時散會せり。同會は今般更に會長副會長を撰擧して、益婦人に關する敎育上の運動を擴張せらるゝ由なり。

○築地英語會。　今般有志の紳士貴女が發起せられたる同會は、築地三十三番館を假會場に充て英人サンマー氏夫妻令孃其他諸外國人の賛助を得て、近々其の一回を催さるゝ由にて男女に拘はらず廣く會員を募らるゝとの事なり。

○京都通信。　婦人共勵會。　池田たつ、中島春野等諸氏の首唱に係る同會は務めて舊來婦女子の弊風を矯め婦人の地位を高むるを目的として每月二回諸學士を聘し家政、經濟、育兒、衛生其他婦人諸般の講話を催さるゝ由なり。　同志社。

同社は日を追ふて益盛大に趣き、今般更に其女學校に別科を設け、割烹、裁縫、編物、音樂、英語の五科中一科以上を修むる者をも教授せらるゝ由。幻燈會。當地にては所々に教育幻燈會の流行する中に去月十日北桑田郡協一尋常小學校開業式に行ひし幻燈會の如きは參觀者千人餘にして其大半は婦人なりし由。京都府女學校。同校は英人エスデール女史を聘して專ら洋服裁縫、兼英語科の生徒を募集せり。

○金澤の和洋折衷女服。金澤の女生徒中には和洋折衷の洋服を着用する者多く、其原品は悉く木綿を用ゐ上部は筒袖襦袢にて下部は行燈袴の廣き樣な物を着し價の廉且つ便益なるを以て此折衷洋服大に勢力を得ると云ふ。

○富山婦人交際會。同所女學校教員諸氏が設立せられし同會は益隆盛に赴き新に入會する者追々增加する由なり。

批評

斯氏女德新說。矢島錦藏氏譯、原著はジヨセフ、シリツト、發兌は共益商社。全卷

の結搆は女德の是非につき之を入門に分ち毎門例を擧げ語を引きて詳に論じたる原著者の功勞多しと云ふべし。矢島氏之を譯するに當り力めて難澁なる語を避け及ぶたけ平易に說かれたるのみならず、猶或は敷衍して一層の明瞭を加へしが如きハ其注意實に有難し。素より原書の主義たる女子の本分などを証するに於ても全く宗敎を基本として論じたるものなれども、而も其如何なる事をもて女子の本分とすべきか、女子の美質とすべきかと云ふ一點を見るに於ては假令其宗敎を信せざる者といへども之を見ば利益する處ある少からざるべし。但譯文は原文の意をなるべく其儘に寫出ださんと力めし物の如く、時には迂曲に過ぎて意味容易に解し難き處などあるに似たり。是記者が些しく遺憾なりとする處なり。

英和尺牘書法。第一高等中學校敎諭井上十吉君著、吉岡商店發兌。少年の時より早く英京倫敦に遊び久しく其地に留まりたる井上氏の著述なれば其完美なるは勿論の事ながら殊に其編纂のすべて著者獨得の伎倆を以て本邦人にして英語を學ばんと欲するものゝ望を滿足せしめたるは記者が著者のために双

手を擧げて賛辭を呈するものなり。英語の流行するに隨ひ、今日に至るまで我國に於て出版せし英和尺牘の案内は其數滿天の星辰も啻ならざる樣なれども實に其謂ふところは皆彼邦の事物にのみ付きて筆を起したるもののみにして我國人に利益する處の如きは極めて少かりし有樣なり、然るに今此書あり。初學は更なり苟も心英文に在るものは始めて津頭に船を得たる心地するなるべし。加ふるに引例の數多くして説明の丁寧なるは著者の注意を見るに足るべくまた著者が此文に深き一斑を見るに足るべし。

寄書

いら都女の廢刊を待つ。

顔半居士

雨天には傘を翳して往來は身体が濡れず、暗夜にも提燈を携て遊歩は足下が見ぬるといふ理屈も十錢紙幣の過剩金に一圓銀貨を投與する倥侗漢といへども知得する處にして誰人か感心と稱へんや。然りながら未だ世上の蒼生雨を凌ぐ好術を悟らず、暗を照す良具を知らざりし古代に於て、此の傘あり提燈なり出來

したるを見し時にも、定めて膽魂を壓し潰して閉口感服せしならん、今となりては珍奇しく覺へぬのみならず、却て迂遠くなりたるが如し。是れ此器具の粗惡下りしにあらず、全く蒼生が才智に進歩したるなり。依て想ふに諸輩の精神を惹き、社會の眼瞳を驚かして拍手喝采成程至極と賞讃を得來たる本誌我ら都女を把て數年の後日翻讀さんに現時の新説は腐説と變じ、卓論も凡論と化し、毫も吃驚仰天せぬこと、恰ど雨天の傘、暗夜の提燈と一般じ感覺あらんとす。是れ取りも直さず我ら都女記者の目的を達したる時にして日本女子の文明に進みさる期日なり、故に、居士も本誌盛大の場所を一足に飛び越して廢刊を待つと題し、傘屋の小僧と等しき骨折損の理屈を贈る。

餘興

新作謎。

三。産地は鑛山、住處は木室、我家をば生涯はなれず、諸人には日日使はるゝもの。何。

四。合へバ切れ、切れねばあはぬものハ何。

第二號新謎の答。第一、己の母。第二、縫針。

人の名を言中てる法。

甲表

いはほとりるわよれつなゐけこてさみ
ろはへとぬるかよそつらのまけえてきゑ
にはへとをわかよねならくまけあさきひ
ちりぬるをわかようゐのくまけめゑひみ
たれそつねならむうゐのおくやまけん
ふこえてあさきゆめみしゑひもせすん

乙表

一	二	三	四	五	六	七	八
い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち
九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六
り	ぬ	る	を	わ	か	よ	た
十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四
れ	そ	つ	ね	な	ら	む	う
二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二
ゐ	の	お	く	や	ま	け	ふ
三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
こ	え	て	あ	さ	き	ゆ	め
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八
み	し	ゑ	ひ	も	せ	す	ん

甲表のみを出し置きさて言ふやう名前の頭字は表中何れの行中にありやと問ふとき第三行第四行第五行の中よありと答ふれは第三行の第一字なるよといろはの第何字目なるを數へ第四行第五行も同樣よして其數を加ふれハ二十八となるいろはの第二十八字く。ハ即求むる字なり其次の字ハと問ふとき第三

行のみにありと答ふれは其行の第一字に。れ即求むる字なりよりて其名はく。に。なるとを知る乙表は勘定の勞を省くためにに掲げしなり此表は何事にも應用せるとを得べし。

紫の朱を奪ひ鄭聲の雅樂を乱それ君子の憎むところ、眞鍮と黄金は似たものなれと正体の貴賤格別なれば、是に等しく人の状善と不善と紛るるもの甚多し、能く見分けてまどふとなかれと清少納言の筆精にならひてわかわらたとふるも鵜に紛れしからすといはんか。

律義とおろか。 器量あると横着。 物識りと出過きもの。

詞少きと不挨拶。 和かなと自堕落。 堅き人と偏屈人。

慇懃と諂諛。 諂なきと我儘。 信心者と愚痴者。

悟た人と滅法者。 氣丈なと無分別。 落付いたのと不精など。

さとい人と早合點。 丁寧者と遲鈍漢。 愼深いと埒明かぬ。

發明なと猿利口。 用心深いと臆病。

社告

弊社いらつめの儀ハ去る七月初號發兌より大方の御批判宜く續々御注文下され、號を重ぬることと僅に三回にして既に今日の隆盛を見る、社員の幸榮この上なし。依て此に改良の方案を畫し、廣く諸學士の協贊を得て、紙數を增加し、記載の項目を增設し、主義を男女一体の着實ニ取り、基礎を理科の實學に置き、議論を公明にし、記事を精確にし、益進んで大方の愛顧に答へんとす。直接の關係を有せらるゝいらつめの方々、及び女子敎育に熱心する貴紳貴婦人、希くは從來の眷顧を空うせず尙愛讀を賜ハらんことを。

女子敎育ニ關し疑問を有せらるゝ諸彥にして之を本社に報せられなバ本社ハ特に委員を撰びて之が研究に從事し、其成蹟ハ特別の書狀を以て之を報ずべし。疑問の重大ニして漫りニ本社の意見を付しがたきものハ特に學士の說明を請ひ之を本紙に登錄することあるべし。

本紙には論說叢話を掲載致すべきのところ都合により之を次號に讓る。

弊社いらつめの儀是迄一手大賣捌を團々社支店ニ委托致置候處今般本社の都合ニより右之委托相解非常の改良相加尙從前の定價を以て本社ニ於て直接賣捌候事ニ相定可及丈府下地方愛顧諸君の御便利相謀候ニ付此段謹告仕候也

●第一高等中學校教諭井上十吉先生著

英和尺牘書法

全一冊 定價金二十五錢 郵稅六錢

●第一尺牘用普通語第二同字句第三英文書簡書體第四節首及節尾ノ書方第五書簡ノ性質ニ由テ書體ノ異ナル事第六書簡類例數十章第七認方心得及略語等ヲ記載ス

本邦の風俗習慣に基き通常往復文の書方を示す

英語の普及に隨ひ英文書簡の往復繁多なるべきは理の當然なり去れば之か書方を稽古すべき無論なれども如何にせん數多ある用文章の原書は申すに及ばず我國出版のものにても概ね原書を主とし譯解せるものなれば我國の人情習慣に適せず之に習ひ書簡を認んとせば却て己が意を枉るの不都合なり又丁寧にすべきをせず左までにもなき處へ馬鹿丁寧の言語を用ひ笑を招く事不尠此書は本邦の習慣を主とし巨細に記載せる珍書なり

東京々橋區宗十郎町十一番地

吉岡商店

●農工商雜誌

每月壹回發行 目下第四號發兌

本誌ハ農業山林水産工業商業ノ五門ニ區別シ各門ニ關スル實地製作法及改良發明等其他當業者ノ參考トナルヘキ雜件ヲ掲載シ主トシテ産業ヲ興殖スルヲ以テ目的トナス本誌發行日尚淺キモ大ニ江湖ノ好評ヲ博シタリ

○定價六冊前金三十三錢○十二冊前金六拾錢○外郵送稅一冊ニ付壹錢○見本ハ壹錢切手七枚ニテ遞送スベシ

東京神田區小川町壹番地

農工商雜誌社

特別非常

書籍大安賣廣告

弊店ハ大阪市中安賣の泰斗と仰がれ夙とに世の高評を得る久し此度移轉開業の大祝ひに際し和、漢、洋新版書、飜譯書、醫書、律書、稗史、小說、類數百千種を三十日の間勉强の上に勉强を加へ損失を顧みず又となき大安賣を相始め候間多少を論せず永當〳〵澤山御注文被下度候●右大安賣書目直段書ハ調成致候ニ付き郵券二錢御送付次

第無代價にて進呈可仕候
三府諸新聞雜誌も同様三十日の間に御注文の諸君に限り特別を以て各本社よりの代價より更に一割引の大減價にて至急御配達可仕候●其新聞雜誌目錄減價表も御申越次第是れ亦無代價にて送呈す

山崎忠興譯

貴女紳士 交際の栞 一名西洋遊戯の鑑 全一册

今や洋風の交際日と追ふて盛に行はれ身中人以上に在るの士君子は往々夜會舞蹈の筵に臨まざるを得ざるの場合少からず然るに此交際の法は未だ本邦に新なると以て時好と追ふの士君子は勿論舊套を守るの人と雖も之と知らざれバ大に恥と取ること尠しとせず本書ハ男女公會に於て坐作進退の注意より紳士貴女互に相對するの心得等に至り又舞蹈の種類方法數種と擧げ丁寧詳細に書き述べたるものにして加ふるに傍訓とも附したれバ婦女子と雖も一讀忽ち交際の新法に通じ舞蹈の諸法を諳するを得寶に當世必讀と謂ふべし請ふ江湖の紳士貴女諸君續々愛購を賜はんことを

東京本町三丁目
金港堂 原亮三郎本店
大坂北久寶寺町
金港堂 原亮三郎支店

毎月第二土曜發兌○一册定價金八錢○六册前金四十五錢○十二册前金八十錢○府外の分は郵税中受郵劵代用御斷申上候

持主兼印刷人 新保磐次
編輯人 正木政吉

東京本郷區湯島天神町壹丁目五十九番地
發行所 成美社

遞信省認可